

平成 20 年度

波介川河口導流事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

かみのむら

上ノ村遺跡 発見の護岸遺構・堤防遺構

説明会資料



記者発表 2008年9月25日(木) 午前10:30～11:30

現地説明会 2008年9月28日(日) 午前10:30～11:30 / 午後1:30～2:30

(財) 高知県文化財団 埋蔵文化財センター  
高 知 県 教 育 委 員 会  
国土交通省四国地方整備局高知河川国道事務所



1. 発掘調査名：平成 20 年度 波介川河口導流事業埋蔵文化財発掘調査 上ノ村遺跡発掘調査
2. 調査の経緯：今回公開する区域には、盛土による堤防が残っていましたが、波介川の水害に備える上記事業に伴って事前の埋蔵文化財調査を行ったところ、旧堤防の中あるいは下から、石積みの堤防が検出されました。さらに下から、石積み護岸とそれに伴う遺構群が出土しました。
3. 事業主体：国土交通省四国地方整備局高知河川国道事務所
4. 調査主体 / 実施機関：高知県教育委員会 / 財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター
5. 調査期間：2008 年 4 月 18 日～ 2009 年 2 月末日（発掘調査）
6. 発掘面積：8000 m<sup>2</sup>（堤防・護岸遺構調査区平面積、予定）
7. 出土した遺構・遺物の内容

(1)遺物：中世・近世・近代陶磁器、瓦、鉄滓、石臼、砥石等 整理箱 5 箱

(2)遺構

	確認長	幅	高さ	法面傾斜	石材規模 / 加工	積み方	付属施設 / 修築	推定時期
石積み護岸遺構	250	3.5 ~ 9.5 (残存)	2.0 ~ 4.3 (残存)	38 ~ 40°	0.45 ~ 1.1/ 自然石	野面積み	石出し。突堤状遺構	江戸前期
石積み堤防遺構	120	7.0	4.2	41 ~ 46°	0.2 ~ 0.6/ ハツリ	落し積み	修築 2 回以上。 のち盛土。	近代

単位：m

(3)遺構の時期や県下での位置付け

今回検出した護岸遺構と堤防遺構は表紙写真のように交差しており、新旧関係がありますが、遺構の構造上、現時点では内部を調査していません。またこれだけの大工事にもかかわらず、文献も直接関連するものは現在のところ知られていません。

本県の江戸時代の石積み遺構としては、表のような例が

知られています。石材や積み方には各々個性がありますが、上ノ村の石積み護岸遺構の積み方や、丁寧に「間詰め石」を配する手法には、城郭にも使われた技術との関連をみることができます。

このように、現時点では出土遺物や文献から遺構の時期を決定することが困難ですが、石の積み方や石材の状態を他県の例などと比べると、本遺跡の護岸遺構は江戸時代前期の特徴をもっています。また、付属する「石出し」を含めて、後記の「太閤堤」と構造が似ています。なお、上ノ村の護岸遺構を覆っていた砂利からは江戸時代後期の陶磁器片が出土しており、本遺構はそれ以降に洪水等で埋まったと推定できます。

一方、石積み堤防遺構の積み方や石材加工痕（ハツリ）には明治時代以降の特徴がみられます。それに土を盛った堤防は、その後さらに一定の期間をおいてできたと考えられ、付近からは近・現代遺物も出土していますが、これらの堤防についても明確な記録は今のところ見つかっていません。

(4)まとめと今後の調査について

本遺跡の護岸遺構に似た例を全国で探せば、近年宇治市で発見され、注目されている「太閤堤」があります。豊臣秀吉によるもので、「石出し」のつくりも本遺跡の護岸遺構によく似ています。太閤堤や上ノ村遺跡の護岸遺構は、発掘調査で出土し、後世の大きな改修がみられないことが重要で、河川護岸としては国内でも稀な遺構です。また、本遺跡で現在検出中の突堤状遺構は、水流制御や船付場確保などの機能が

	時 期	指 導 者	積 み 方 等
近世高知城石垣	江戸初期～	北川豊後 (初期)	野面積み他。 改修多数
物部川 旧堤防遺構 (上岡北遺跡)	江戸時代	野中兼山か	川原石使用
旧手結港	江戸前期～	野中兼山	野面積みあり
旧津呂港	江戸前期～	野中兼山	—
柏島石堤	江戸前期～	野中兼山	自然石。 傾斜 45°
須崎 土佐藩砲台跡	幕末	—	野面積み他。 自然石

県下の石積み遺構



上流側より（奥は土佐湾）

また、本遺跡で現在検出中の突堤状遺構は、水流制御や船付場確保などの機能が

考えられますが、このような遺構も全国的に極めて珍しいものであると同時に、本遺跡の性格を物語っています。このように、今回出土した石積み護岸遺構は、わが国の治水技術や石積み技術を知る上で貴重な資料です。

石積み護岸遺構の上につくられている石積み堤防遺構についても、このような堤防の全容がわかる希少な例で、近代土木技術の資料になるとみられます。

現在、発掘調査は途中の段階ですが、このように全国的にも貴重な資料であることがわかってきました。もちろん本県の歴史資料としても、表にあげた諸遺構と比較することにより、土佐の土木技術史を語る重要な資料になります。当遺跡の石積み護岸遺構がつけられたと想定される近世前期といえ、野中兼山が活躍した時期であり、そうであれば、近世高知城の石垣から続く土佐藩の石積み技術との関係が考えられます。また、このように大規模で堅固な施設を仁淀川河口部に築いた理由も考えなければなりません。

今後の調査で、内部から出土する遺物からみた正確な構築時期や、遺構の内部構造が明らかになり、埋もれていた伝統技術が解明されることが期待されます。



↑ 石出し1付近

←  
太閤堤の石出し  
〔「発掘宇治'07」宇治市歴史資料館より転載〕

石出し（下流側から）